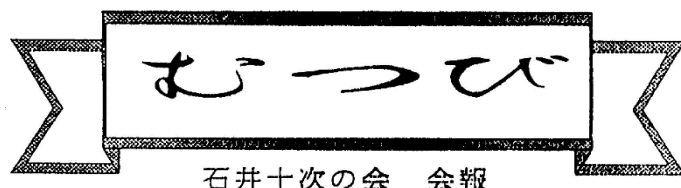


2026 年  
(令和 8 年)  
2 月 13 日



341 号

## 「石井十次のふるさと」高鍋訪問記

前 公益財団法人大原芸術財団

財団本部事務局長 森川 政典

残暑厳しい 8 月 23 日（土）、翌日の石井十次セミナー参加のため初めて高鍋を訪問いたしました。実は、随分前から石井十次生誕の地を訪れたいと思い願っていましたので筆者の小さな夢が実現したわけであります。ここにご縁をいただきました皆様に心より御礼を申し上げる次第です。旅程は、飛行機か、JR か、フェリーか？と想像しながら計画いたしました。結果、一番“地”に着いた交通手段で訪れることにしました。そのため、高鍋は遠くて長～い『旅』となりました。その訪問を振り返りご紹介いたします。

正直距離は遠く感じたのですが、高鍋駅に到着し改札口を出ると、何だか懐かしい、そして居心地の良い原風景を目の当たりにしました。良くどこでも「近くて遠い存在」という言葉は使われていますが、筆者にとっては「遠いけど“近い”存在」つまり心のふるさとであり、人々の気持ちが寄り添う拠り所のような空気を感じました。この不思議な感覚は何だろう？そう考えるうちに、まさにこれが石井十次生誕の地を訪ねる“聖地巡礼”なのではないかと気づき感銘を受けました。

高鍋駅では児嶋草次郎理事長直々にお迎えいただき、石井記念友愛社の主な事業所や石井十次記念館をご案内いただきました。いくつかその感想も述べたいと思います。草次郎理事長からは「幼稚園らしくない幼稚園」、「外壁には白壁を採り入れた」、「保

育施設内に緑豊かな植物園」、「もっと他の野菜なども植えれば良いのに」、「壁一面に絵画をかけている」等々、目からウロコのお話をたくさんいただきました。この発想や取り組みは、大原孫三郎が 1923 年に倉敷中央病院を建設、1930 年に大原美術館を建設してきたその精神と相通じるものがあるように感じたわけです。孫三郎が建てた「病院らしくない病院」という言葉も重なり、江戸情緒たたずむ白壁のまちに古代・ギリシャローマ風の大原美術館を建設するなど、尖った発想が大原イズムの源流です。きっと石井十次と大原孫三郎、児島虎次郎との深い信頼の絆が今も脈々とその高鍋の地でも継承され、風土をつくりあげているのではないかと思います。だからこそ、ふるさとに帰ったような安堵感、心の拠り所を感じたのかも知れません。

本年は戦後 80 年、昭和 100 年の節目の年を迎えています。高鍋も例外ではなく空襲を受けたとの悲しいお話を伺うと、戦没者の慰霊に哀悼の誠を捧げその土地を守り奉る精神を大切に鎮守すること石井十次のふるさとを守り育てるうえでとても大切な気持ちではないかと思います。その気持ちを活動の礎にされているという点も私心を超えた公に資する石井十次の精神につながるものです。昨今ダイバーシティ&インクルージョンの時代を迎え、石井十次自身が試みた救済活動の心根を比較し考えてみると、そこには弱者を含めた社会の構成メンバーを下からも見る目が備わっていました。「共創」の考え方は、既に同胞愛によって時代の先端に導かれていたのではないかと感じています。これからも相互に交流を深め、それぞれの場の力を世界に発信していきたいと願っています。本当に実り多い高鍋訪問となりました。

ありがとうございました。

## 岩村真琴 一十次の甥、志なかばに斃れる一

### 1. 十次の血を引く真琴

岩村真琴は十次の姉・静子と岩村真鉄の長男、つまり十次の甥である。真琴は才能にめぐまれ、積極的な性格で、周囲から囑望されていた。十次は真琴に望みをかけ、自分の意志を継ぐ者と考えていた。しかし残念なことに、真琴は米国遊学中に病を得て帰国し、若くして惜しまれながら死んだ。十次は心から彼の死を悼んだ。

### 2. 生い立ちから渡米まで

岩村真琴は明治 11 年 10 月 3 日に生まれた。両親は明治 20 年に十次が岡山孤児院を設立した当時から、十次の支援者として働いていた。真琴は孤児たちに交って孤児院で育った。成人すると岡山孤児院の職員として働いた。明治 32 年（1899）8 月、岡山孤児院は岩村真琴、長谷川昇次郎、渡辺栄太郎の 3 人を海外幻燈遊説隊としてハワイから米国に送ることにした。彼等の任務は、岡山孤児院の幻燈を観衆に見せて孤児院を説明し、寄付金や賛助員を募ることである。ハワイで幻燈遊説会を 6 回開催した後、米国に渡った。米国本土では黄色人種蔑視の風潮があり、寄付金は集まらなかった。明治 34 年（1901）5 月、海外幻燈遊説隊の巡回は打ち切られた。

### 3. 米国での生活

岩村真琴ら 3 人は米国にとどまり、新天地で自己の生き方を築いていった。真琴はサンフランシスコから日本に手紙を送り、米国での生活や経験を十次に伝え、自分の生き方と目標を述べた。この手紙から真琴の才能と米国での前向きな生き方を知ることができる。彼は働きながら前年 8 月に現地のローウェル高等学校に入学し、この年 8 月より 2 学年に進級するという。英語にも慣れ、大抵のことは聞き直しせずに会話できるようになったという。8 月の新学期より 2 年に進級して英語、ギリシャ語、ラテン語の 3 ヶ国語を学ぶ予定で、しばらくはローウェル高等学校で勉強する、と向学心に燃えた胸の内を語っている。大学進学も計画していた。

真琴らの渡米の目的のひとつは、米国の孤児院を視察して孤児院教育の内容を学び、岡山孤児院に報告することであった。真琴の手紙はその報告も兼ねていた。

真琴は短期間のうちに米国の孤児院教育の現状を正確に把握した。彼は岡山孤児院の教育に米国の教育の方法を取り入れてはどうかと提案している。孤児院教育に必要なことは、卒業後に社会で生活するための「処世の方法」の素養を身につけさせることであり、女子には「簡易経済法」を、男子には「金銭上の観念」を植え付ける必要があるという。サンフランシスコの孤児院では、卒業後には将来のため実業学校に通うか、商業や農業に従事する。学びたければ、昼は働き夜に学校に通う。働く者のため孤児院内に夜

学が設けてある。卒業後は自立する。自分のパンは自分で稼ぐのが米国流であり、日本もこれを見習うべきだという。

前向きに生きる若い真琴にとって、米国は前途の開けた新天地のように見えた。しかし不幸なことに、希望にあふれた真琴を病魔が襲ったのである。

#### 4. 真琴、病気のため無念の帰国

明治 35 年（1902）夏、真琴は病のために米国での希望に満ちた前途を諦め、日本に帰った。彼は茶臼原孤児院に住み、病を養うことにした。

明治 37 年 11 月、十次の母・乃婦子<sup>のぶこ</sup>が永眠した。十次は高鍋に帰り、父・万吉に会い、真琴に手伝わせて母の 52 年間の生涯を記録に残し、葬儀を営んだ。12 月、十次は茶臼原農林部を復興させ、真琴を農林部長に<sup>ぼってき</sup>抜擢した。

十次は真琴に、敷地の境界に<sup>とて</sup>土堤を築き、幅 8～10 間の大道路を開くこと、杉や桧を植林すること、井戸を開<sup>かいくつ</sup>掘すること等を指示した。十次は真琴に役割を与えることで、真琴が気力をとりなおし、病気に打ち勝つことを願った。茶臼原孤児院の準備を 3 月までに終わらせ、4 月には岡山孤児院から児童を送ろうと考えていた。明治 38 年 2 月、真琴から手紙が来た。「暈が出来たら自宅から茶臼原に移住する」という。十次は「天、彼が健康を祝して彼を茶臼原原野に置き、かの所に置いて、群羊<sup>ぐんやう</sup>を牧<sup>ぼく</sup>養<sup>よう</sup>せしめたまわば、予は実に感謝に堪えざる也、願わくばかくなしたまわんことを祈る」と日記に記した。十次は真琴の回復を天に祈った。

翌明治 39 年は東北大凶作の年である。岡山孤児院は貧窮児を無制限に受け入れることとし、1 月に福島および仙台に救済事務所を置いた。5 月、孤児院は孤児 1,200 人体制となった。7 月、十次は茶臼原移住隊 50 名を出発させた。10 月、茶臼原農林部に農業小学校を開設した。

#### 5. 真琴、斃れて再び起たず

真琴は茶臼原孤児院の中心人物になるはずだったが、病は重くなり起つことができなくなった。明治 39 年 9 月、高鍋に帰った十次は真琴を見舞った。十次は 12 日間高鍋に滞在し、孤児の茶臼原受け入れの準備をした後、岡山に帰った。10 月 13 日、「真琴いま眠る。明日葬式する」との電報が来た。十次が後継の望みを託した甥は惜しまれながら昇天したのである。享年わずか 29 歳だった。

（編集委員 石川正樹）

今月の巻頭言は、8月に開催された「第25回石井十次セミナー」の講師の方に執筆いただきました。石井十次セミナーは「藩校ブラスアカデミー」の演奏で始まります。「藩校ブラスアカデミー」は、平成音楽大学教授 馬込勇先生の指揮・指導のもと高鍋町内の吹奏楽部の中・高生と顧問の先生、大学の先生



方で編成されています。昨年は、石井十次が日本で初めて結成したスクールバンドを再現して、トランペットや小太鼓など9つの楽器で「讃美歌 312 番」を聞かせてくださいました。123 年前に十次の音楽隊が国内外を巡ったことを思い起こさせる素晴らしい音色が会場に響き渡りました。

また、黒木敏之氏（高鍋町長）の作詞・作曲による「石井十次の歌」を大学の先生が歌ってくださいました。歌詞の「♪子どもたちに伝えたいことがある（中略） 為せよ屈するなかれ 時重なればその事 必ず成らん♪」は、十次の言葉を歌にしたものでした。歌詞の中で、「♪十次 不滅の魂がある」は、力強くそし

て優しく語り掛けるように歌われ、困難を乗り越えて歩み続けることが夢の実現へとつながると、励ましていると感じました。「藩校ブラスバンド」の中学生は、演奏の楽しさと故郷の温かさを感じながら練習に取り組んでいると話してくれました。毎年、素晴らしい演奏を聴かせてもらえることも石井十次セミナーの魅力です。会員の皆様も今年の夏は参加してみませんか。（編集委員 西村さと子）



## 方舟館からの お知らせ

明治末期、岡山から移築され、石井記念友愛社の敷地内に立つ方舟館。

現在は石井十次資料館の案内窓口、また、石井十次の会事務局として使われています。

### ★新会員のご紹介（敬称略）

【宮崎市】 岩切 守弘 【新富町】 小原 信弘 【延岡市】 長友 慎治 【北九州市】 安東 和子

### ★ご寄付をいただきました（敬称略）

【宮崎市】 本田 敬 宮崎聖三一教会 【西都市】 弘田 美恵子 三井 京子 【日向市】 ゆうかむ会

\*ここまでの掲載者は編集等の都合により 1 月 20 日までのものとしています。

この会報は、宮崎県を中心に全国 1700 余の個人・団体に毎月送付しています。

㊟ 884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-  
社会福祉法人 石井記念友愛社後援会  
石井十次の会 TEL/FAX 0983-32-4612  
メール [yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp](mailto:yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp)

### ★編集後記

公務ご多用の中、第25回十次セミナー講話の森川政典様に玉稿を頂きありがとうございました。セミナーを通して、石井十次と大原孫三郎の思いが今でも受け継がれていると感じました。

（編集委員 西村さと子）